

凡例……………一
枕草子系譜……………九

一 春は曙……………一〇
二 正月一日は……………一一
三 大進生昌が家に……………一五
四 上に侍ふ御猫は……………一七
五 山……………二二
六 清涼殿の丑寅の……………三三
七 すさまじきもの……………三五
八 にくきもの……………三三
九 心ときめきするもの……………三六
一〇 過ぎにし方戀しきもの……………三七
一一 木の花は……………三七
一二 節……………三九
一三 鳥……………四一
一四 蟲……………四五
一五 にげなきもの……………四七

一六 草の花は……………四八
一七 めでたきもの……………五〇
一八 あさましきもの……………五二
一九 二月つごもりごろ……………五三
二〇 九月ばかり……………五五
二一 円融院の御はて……………五五
二二 胸つぶるるもの……………五八
二三 うつくしきもの……………五九
二四 むつかしげなるもの……………六〇
二五 雪のいと高うはあらで……………六〇
二六 宮にはじめて参りたるころ……………六二
二七 したり顔なるもの……………六六
二八 風……………六八
二九 野分の又の日こそ……………六九
三〇 うれしきもの……………七一
三一 雪のいと高う降りたるを……………七三
三二 うちとくまじきもの……………七四
三三 この草子目に見え……………七五

枕草子解説

一 作者とその後宮 枕草子の作者清少納言は、歌人の家系である清原真人の出身で、その父元輔は、古今集につぐ才二の勅撰集である後撰集の撰者の一人で、後年、河内、周防、肥後の国守を勤めた所謂受領であつた。清少納言は、大体村上天皇の康保末年の出生で、その時父元輔は六十才近くであつた。その歿年は、後一條天皇の治安万壽年間ではないかと推定される。若くして橘則光に嫁し、男子則長等を儲けたようで、その結婚生活を解消して正暦四年頃、時の一條天皇の中宮(後に皇后、但し本書の頭註では中宮の稱呼で統一する)定子の方に宮仕に上つた。この定子中宮は、藤原氏の氏長者、中関白道隆の長女で、天皇の御寵愛を専にされていた。清少納言はこの宮のお氣に入りの女房になり、後宮生活に花をそえる役割を果たした。清少納言の宮仕中の主要事項を表にすると次の如くである。

- 正暦(九九〇—九九四)
元、正、廿五 定子入内 二、一、女御、
一〇、五、中宮
三、二、 円融院の御果ての年(一一)
四、 清少納言官仕 二(二六)
五、二、廿 関白道隆(養善寺供養)
長徳(九九五—九九八)
元、三、九 内大臣伊周、関白道隆
病間文書内覧
四、十 関白道隆薨去
四、廿七 右大臣道兼関白
五、八、一〇 関白道兼薨去

一 春 曙

平安時代の自然鑑賞の一つの代表的な型として考えられる段。
 ○春は曙—文章の形式上は完全なものではない。述語が整っていない。たとえ「春は曙いとをかし」とでもなるべきものである。「春は」は総主語又は提示語と云われる用法。
 ○夏は夜—春は曙と同じ句法である。をかし—今日使われている笑ふべしの意ではなく、趣あり、美的価値ありと云う意味に用いられる事が多い。こう云ふ意味の「をかし」という語の使用が枕草子の中には四百以上もある。
 ○山の端いと近う—(イ)山の端が人目にいと近く。(ロ)夕日が山の端にいと近く。解釈に兩説ある。
 ○三つ四つ二つ三つ—能因本、三卷本抜書本には「三つ四つ二つ」とある。文学的表現としては「三つ四つ二つ」の方が優っているといえよう。
 ○つとめて—(イ)早朝の翌朝。こゝは早朝の意味。○もて「持ちて」の略。○つきづきし—つきなしの対。似合はしい。○ゆるびもていけば—もて「は形式語となり接頭辞となっている。進行の意を示す。ゆるくは気温が少しあたたかく寒さがゆるんでゆくこと。○火桶—丸い火鉢。○わるし—興趣に背く意。例へば「をかし」の反対の意味を示す。

春は曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ螢の多く飛びちがひたる。又ただ一つ二つなどほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥のねどころへ行くとして三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて風の音、蟲のねなどはたいふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにあらず。霜のいと白きも、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

二 正月一日は

年中行事的な記事として注目される文段。
 ○正月一日—公事根源に「四方拜すべらぎ風星を唱へ、元正寅の時に新拜し給て、儀災をも拂ひ寶祚をも祈し給て、候にて侍にや」
 ○めづらしう霞—珍らしく霞、春になつたのである。平安風の季節感である。拾遺集卷一春、忠岑「春立つといふばかりにやみよしの山も霞みて今朝は見ゆらん」などの歌もある。

正月一日は、まいて空のけしきもうらうらとめづらしう霞みこめたるに、世にありとある人はみな姿かたち心ごとにつくるひ、君をもわれをも祝ひなどしたるさまごとをかし。七月、雪まの若菜つみ。青やかにて、例はさしもさるもの、目近からぬ所に、もてさわぎたるこそをかしけれ。白馬見にとて、里人は車清げにしたてて、見に行く、中の御門の闕、ひきすぐるほど、頭一所にゆるぎあひ、刺櫛も落ち、用意せねば折れなどして笑ふも又をかし。左衛門の陣のもとに殿上人などあまた立ちて、舍人の弓ども取りて馬ども驚かし笑ふを、はつかに見入れたれば、立替などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をならすらんなど思ひやらるるに、内にて見るはいと狭きほどにて舍人の顔のきぬもあらはれ、まことに黒きに、白き物いきつかぬ所は、雪のむらむら消え残りたる心地していと見苦しく、馬のあがりさわぐなど

○君をもわれをも—御主君即ち大君天皇陛下ともとれるであろう。
 ○正月七日—五節供の一。人日とも云ふ。七種の菜羹、白馬節会が行われる。春曙抄に「七日の若菜のあつ物は、公事根源を見る事也」とあるが、公事根源を見ることがある。拾遺集卷一春、忠岑「春立つといふばかりにやみよしの山も霞みて今朝は見ゆらん」などの歌もある。
 ○白馬節会—公事根源に「あるひは青馬の節会とも申すなり。其の色なり。是れによりて正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を除くといふ本文待りなり。この日天皇は紫宸殿に出御になり、七疋づつ三回

雪のむらむら消え残りたる心地していと見苦しく、馬のあがりさわぐなど